

共に生きる

二〇一四年十一月十九日

バイブル・サービス

牛 渡 淳

今日は、「共に生きる」というテーマでお話したいと思います。今、私は学長として本学のディプロマ・ポリシーというものを作っております。皆さん、あまり聞いたことがないかもしれませんがディプロマというのは卒業証書ということです。ですから、このような人に卒業証書をあげますよ、という基本的な方針であります。言い換えれば、この仙台白百合女子大学ではどのような人を育てようとしているのかということです。学生の卒業時の姿を考えているわけです。その中でも、いちばん大きな柱は何かと言いますと、やはり、建学の精神に則ってキリスト教について理解しており、その精神に基づいた世界観や人間観を身に付けていることがいちばんの基本だと思います。ただ、そう言いましても具体的なことが見えてきませんので、私は今、三つの柱を作っております。一つは、「弱い立場の人への思いやりと愛情を持ち、人間の尊厳と人権を尊重するような価値観を持っている人」。そういう学生に卒業証書を与えたいと思います。二番目の柱は、「命を大切にし、命を慈しむ心を持ち、家族の価値を重視し、国境を越えた人類愛を持って他者に奉仕をしていく価値観や知識を持ってほしい」。そういう人に卒業証書を与えたいと思います。三番目の柱は、「グローバル社会の中で、よりよい平和な世界を他者と共に築いてい

くために広い視野を持って、偏見と差別を持たずに異質な他者とともに生きることのできるような価値観や知識を持っている」。そのような人に卒業証書を与えたい。仙台白百合女子大学の皆さんには、今、挙げた三つの柱を持っている方に卒業証書を与えたいと考えているわけです。最後に挙げた、「偏見と差別を持たずに異質な他者と共に生きる」ということにつきましては、聖書にはつきりと描かれてあり、イエス・キリストの「人間の尊重と愛の精神」から導いてきたものなのです。こういった考え方は、近年「共生（共に生きる）」という言葉で表されるようになってきました。もともと、この共生という言葉は、自然界の生物同士が共存する姿を描いたものですが、それが今では人間社会でも使われるようになりました。男性と女性、健常者と障害者、異なる民族や人種、人間と自然といった様々な異なるもの同士が、それぞれを尊重しながら共に生きるといふ姿を表す言葉になっています。私の専門である教育学の分野におきましても二十年以上前から共生という言葉は広く使われるようになってきています。また、設置二年目を迎えております、本学のグローバル・スタディーズ学科のもともとの発想は、この共生社会で活躍できる人材を育成することを目的とした学科です。そうした共生の概念は既に本学の建学の精神の中に、しっかりと組み込まれていることを私はこのディプロマ・ポリシーを作りながら改めて今、確認しているところがあります。

さて、この「共生」という言葉に関して私は最近、上智大学の田中裕教授の論文を読む機会があり、大変啓発されました。今、お話ししたような一般的な共生の考え方以上に、もう少し別の視点から共生を深く考えることができるといふことが分かりました。そのことについて、これからお話をしたいと思います。

田中教授の話のポイントは、共生という言葉をもとの関係で考えるときには、時間性や歴史性ということが必要だということです。私はこれについて次のように解釈しております。例えば、私は今から五年ほど前にフィリピンに

行きました。フィリピンには、本学の設立母体である修道女会があり、アジア各国に修道女会が作っている学校の教師の世界大会のようなものが毎年開かれます。そこに参加しました。日本からは全国の白百合学園の教職員が十数人参加しましたが、フィリピン人のシスターたちは、私たちを大変手厚くもてなしてくれました。ある晩、さよならパーティーでフィリピンのシスターの一人が我々日本人のために歌を歌ってくれました。それは、皆さんよくご存知の日本の「浜辺の歌」という歌でした。真っ白い服を身にまとった高齢のシスターでしたが、大変上手に歌ってくださいました。歌が終わってから、「どうして日本の歌を知っているのですか」と私は尋ねました。すると、次のような話をしてくれました。第二次世界大戦前、フィリピンには多くの日本人が商売などのために暮らしていました。シスターの家には、お父さんの友人である日本人がよく遊びに来ていて、その中の一人の日本人に「浜辺の歌」を教えてもらったということでした。ところが、第二次世界大戦が始まりますと、日本の軍隊がフィリピンにやって来て、フィリピンを支配しました。そして、シスターのお父さんは日本人との付き合いがあったためにスパイと疑われて、日本の軍隊に殺されてしまったということです。まだ幼かったシスターは、あの優しい日本人がどうしてお父さんを殺したのか、どうしても分からなかった、と言っていました。しかし、シスターは日本人のことは恨んでいないと言っていました。そして、幼い頃に日本人に教えてもらった日本の「浜辺の歌」をお父さんの思い出と一緒に何十年もの間、記憶に留めていたということでした。私はこの話をシスターの口から聞いたときに、何ともいえない罪の意識、日本人としての罪の意識を感じました。日本人は、なんてひどいことをフィリピンの人たちに対して行ったのだろうか、と。しかし、このような私の考え方に対しては、それは昔の話であって、今の我々には関係ないじゃないか、我々は昔の日本人が行ったことに対して責任を持つ必要はないのではないか。あるいは、いつまで日本人は戦争の責任を負わなければいけないのか、という批判が出てくると思います。そして、今、そう

いう声が日本人の間にもますます強くなっていると思います。しかし、果たしてそれでいいのでしょうか。例えば、アウシュビッツでのナチスドイツが行った大虐殺を、「あれはドイツ人が行ったことだから我々には関係ない。昔の話だ。外国の話だ」と済ますことはできないでしょう。それは、アウシュビッツの問題は、人間が人間に対して犯した最も残酷な残虐な行為のひとつだからです。同じ人類の一員として、我々自身の問題として考えなければ、同じ過ちを犯してしまうことになりません。即ち、過去の世代、過去の人間の過ちを今の我々の問題として考え、感ずることが求められると思います。フィリピンのシスターの経験についても、我々は今の日本人の問題として受け止めなければ同じ過ちを犯してしまいます。言い換えれば、私たちは過去の世代の人々と共に生きなければいけないということなのです。過去との共生、これが共生の時間性、歴史性ということではないでしょうか。さらに私は、共生の時間性、歴史性を考えるためにもうひとつの視点があると思います。それは、過去との共生と共に、未来との共生ということなのです。未来の世代に対する今の我々の世代の責任と言い換えても良いでしょう。今の我々が行なったことが、これから生まれてくる次の世代に対して悪影響を及ぼさないようにする責任と言えます。未来の世代との共生という視点から最も重要なことは、地球環境問題や地球温暖化の問題であります。これから生まれてくる世代が、今の我々が享受している快適な地球環境を失うとしたら、これほど恐ろしいことはありません。人間が住めない環境を今の我々の生活が作り出しているとしたら、未来の世代に対する我々の責任は重大であります。さらに問題なのは、核兵器や原発の問題です。今、大国同士が戦争を始め、それぞれが持っている核兵器を使えば、明らかに人類は絶滅します。また、原発は将来の世代にツケを回さざるを得ない構造的な問題を抱えています。東日本大震災で原発の被害が地域を滅ぼし、人間が住むことのできない地域を大規模に生んでしまったことを、この東北の地で我々は目の当たりにしました。あの日とき一步間違えば東京もゴーストタウンになっていました。こうした原

発の存在によって、未来の世代が危機に陥る可能性は非常に高いのではないのでしょうか。しかし、今の政治の動きはどうでしょうか。現在がよければそれでよし、経済がよければすべてよしというスタンスがあります。過去の問題と真剣に向き合おうとしませんし、未来の世代への責任を引き受けようとしていません。すなわち、過去の世代との共生も、未来の世代との共生も軽視しようとしております。私たちはキリスト教精神に基づいて、異なる物と共に生きるという共生の理念と、いのちを大事にするという理念をこの時間性、歴史性という視点から、過去の世代および、未来の世代との共生というところまで広げて追及していかなければならないのではないかと考えています。そうした責任感、倫理観を持った社会人を一人でも多く作り出していくのが本学の社会的責任であると考えています。

(本学学長)